

第6回 ESD ティーチャー・フォローアップ研修会 概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

◇開催日時 2022年3月9日(水) 19時~20時30分

◇方法 ZOOM を用いたオンライン研修

◇参加者数 9名

◇内容

ユネスコクラブ実践報告 「奈良の林業の今とこれからを考えよう」

奈良教育大学附属中学校 中村基一先生

【実践の背景】

本教材は地域学習を通して、地域の指導者や林業に携わる人々から学ぶ、総合的な学習の時間の学習教材である。伝統文化や環境保全の一つとして、林業を取り上げる。都が建設された頃から、大量の木材が必要とされ、吉野では室町期から林業が営まれている。平城宮跡の大極殿の再建に際しては吉野林業発祥の地の一つである黒滝村の木材が使用されるなど、関わりも深い。多くの生徒は知識として、伝統的な産業として吉野林業を認識している。しかし、安くないと国産でも買わない、プラスチック製のような利便性がないなど、価格や、利便性に着目している生徒が多い。林業従事者やそれに関わる人々の思いや価値観に触れさせ、自身の価値観の変容を促す。また伐採現場の雰囲気を感じ、こうした伝統を守るために必要なことは何かを自分事として捉えさせたい。さらに林業従事者の高齢化や輸入木材との競争、災害対策など課題を関連付けてとらえ、林業の今後について考えることにした。

【実践の概要】(全10時間)

第1次(1時間) 奈良の林業について知ろう

第2次(1時間) 奈良の林業の課題を話し合おう

第3次(2時間) 黒滝村の林業に関わる人にインタビューをしよう

第4次(6時間) 黒滝村の林業を体験しよう

黒滝村で148年生の杉の大木を切る場面を見学する

大木が倒れる瞬間の雷のような音

命に関わる危険な仕事 重労働 生と死を感じる体験

年輪を数えたり、木の上に乗ったりする体験

親方の言葉「この木の命はここで終えたけど、木材としては今生まれたばかり。これから何十年、何百年とまた生きていく。」

(生徒の感想)

- ・今までよりも木が好きになった
- ・木材を見て感謝の思いを持つようになった
- ・木の家具を見ても、「あんなふうに切られて…」と想像するようになった。

帰りに、黒滝村の道の駅で買い物をしたとき、

吉野の割り箸は割高だが買う(日本の割り箸は気を無駄にしない工夫から作られている)

黒滝村のものを買うことで応援したい

でも、黒滝村の木を使ったものは売っていない。

(木材は吉野や大淀に行かないと買えない)

現在、黒滝村の地域おこし協力隊の方にお願ひして、卒業記念のベンチやテーブルを黒滝村の木材を使って作ってもらっている。

来年度は、生徒が実際に木材を使って何らかの製作をしたい。

法隆寺への遠足と関連させて、法隆寺の柱に使われている木材について考えさせたい。

【意見交流から】

子どもの価値観の変革をもたらしたものは？

→ 大きな木が倒れる現場に立ち会えた 命の終わりと始まりを感じた

木材製品の持っている本来の価値に気付くことができた

この実践をどのようにしたら普遍化させることができるだろうか？

(なかなかそのような場面には立ち会えない)

→ 「命」に視点を置くことがこの実践のキーではないだろうか

木は商品である前に「命」

野菜も命をもらっているわけだが、野菜ではなかなか命は感じられない

そうかと言って、鶏や牛・豚では重すぎる

木はそういう意味では「命」を考えるにはちょうどいいのかもしれない

親方の言葉をどう理解し、どう深めていくかが大事だと思う

食育を通じて命の大切さに気付かされる事はあったが、林業の場でも命の大切さに生徒たちが触れ、心を大いに揺さぶられた

木を伐採するときには、お神酒や塩などを供えるが、それはなぜなのかを考えさせる

150年の木を見たときに、それを植えた人や世話をしてきた人たちの思いを考える

そのうえで、では、今の林業家は同じように150年先を見据えて何をすべきかと考えられる
放置木材など、「命が無駄遣いされているもの」について考えることもできる

これからの林業について考える上ではとても重要な視点

価値観が変容した生徒のその後の様子は？

→ 天然ゴムを使用した消しゴムを見て、「それいいなあ」と言う(高いので買えないが)

ユネスコクラブではない生徒は「高い！」と言うだけ

黒滝村の取組に触れることで、「経済活動において環境を優先する価値観」も育まれたと考える

ESDの実践として、学習者の価値観が大きく変容したところに本実践の確かさがある。

安さや利便性だけではない、そのものの本当の価値について気付くことの大切さが感じられる。